



ズバイル砂漠(イラク、03年3月25日)

イラク戦争開始から6日目。私が同行する米海兵隊を猛烈な砂嵐が襲った。ふと前に座った兵士を見ると、お菓子のスキットルズを食べている。まるで砂にのみ込まれる前に、文明社会の最後の痕跡にしがみついているようだった

## Picture Power



マイユボワ(フランス、07年)

わが子の写真に表れているのは美よりも、親の愛情とその複雑さだ。子供たちはいつも、私が撮った写真は自分じゃないみたいと言う。私にとってこれらの写真は、離れている日が多くても、その時は彼らのそばにいたことの証し

### BETWEEN WAR AND PEACE

## 戦争と平和を 往来する旅

PHOTOGRAPHS BY JAMES HILL

「喜びで満たしてくれる記憶を大切にすると同時に、暴力的で残酷な記憶を消そうとした。しかし戦場に行った多くの写真家と同じように、その亡霊を抑え込むには苦労した」  
ニューヨーク・タイムズのカメラマンで、ピューリッツァー賞受賞者のジェームズ・ヒルは写真集『戦争と平和の間で』の中でこう書いている。50枚の写真と一枚一枚の背景について記した手記から成るこの本には、イラク戦争や英ウィリアム王子の結婚式、ローマ法王(教皇)ヨハネ・パウロ2世の死去などさまざまな歴史的瞬間が収められて

いる。その中でも、やはり彼の心に大きな影響を与えたのは戦争や暴力のようだ。  
「写真家になると決めた私は、世界のあらゆるものを見たいと思った。喜びも愚かさも、希望も悲しみも捉えたかった。だがそのうち、闇が拡大し始めた」とヒルは書く。「夢の中では繰り返し、虚無の縁へ引きずられる。汗びっしょりで目覚め、生きていることに驚く」  
穏やかな日常と、生死の重みが違つ苛烈な世界をヒルは行き来する。その旅はいつも「戦争と平和の間にある感情の緩衝地帯」を経由するという。



**ダシュティ・カラ**(アフガニスタン、01年11月10日)

北部同盟のタリバン攻撃を取材するため、01年秋にアフガニスタンへ。ある日、ダシュティ・カラ村で3人の兵士が炸裂弾にやられたのを目撃した。村人と兵士が駆け寄ったが、3人とも死んだようだった。私は写真を撮りながら何も考えないようにした



**モスクワ**(ロシア、07年11月24日)

プーチン大統領の写真は何十回も撮っているが、残念ながら1対1の撮影は経験がない。プーチンを信奉する若者団体「ナージ(友軍)」のバッジを見たとき、彼のすぐそばに立ち、これから肖像写真を撮るような奇妙な感覚に襲われた



**ウンブリア**  
(イタリア、98年8月13日)

98年春、私はモスクワで恋をした。仕事でローマへ移ったが、寂しくてシルビーに遊びに来てもらった。2人でローマを歩き、ウンブリアへ行った。ある朝、1人でプールにいる彼女を見つけ静かにシャッターを押した。私を最も幸せにしてくれる写真の1枚だ

**スタラヤ・スンジャ**(ロシア・チェチェン共和国、00年1月15日)

第2次チェチェン紛争中、ロシア当局の監視下で前線に入った。首都グロズヌイ郊外のスタラヤ・スンジャで出会ったロシア系避難民の中に、息子の押す荷車に乗せられた老女がいた。彼女は瞬きもせず私を見詰め、話し掛けても返事はなかった



**キエフ**(ウクライナ、92年9月)

前年12月のソ連解体後、ウクライナにいた私に西側からの撮影依頼が増えた。写真は、ウクライナが新設した特殊作戦部隊のデモンストレーション。板を手で割る、ボトルを頭で砕くといった技を見せられ、兵士の腹にナイフを落とすところで観客の緊張は最高潮に